

「野生動物病院」

繁盛記

森田 正治



ます。

四月二四日(木曜日)の午後四時ごろ、根室支庁から電話が入りました。「ハハーン、傷病鳥獣の保護だナ」。いつものように気楽に受話器をとりました。「あのー、ツルをお願いしたいのですが」。一瞬、顔がこわばり「タンチョウですか」。と聞きなおり「そうです」との返事。

特別天然記念物の鳥獣は初めてのことで、正直言って「オレんこへ持って来ていいのかナ」。「釧路市動物園へ持ち込むにしても夕方だしナ」と受け入れることになりました。

右肢は途中から切断され、おそらくは犬かキツネにでも襲われたのだろうと想像。傷口を処置していたら、突然動脈から血液がドバッと、あわてて止血する有様。負傷した時は、随分と出血があったものと思われました。

保護された場所は、別海町の風連湖近くで近所でゴルフ場建設の話が持ち上がっておりタンチョウ、エゾシマフクロウなどの野鳥への影響を心配しています。

今思うに、ミニ動物園を開設(八五年一月)するまで今日の自分を全く想像もできませんでした。野生動物は勿論、自然保護運動なんて他人事のように論じ、オープンするとなぜか野生鳥獣が持ち込まれるようになりました。最初はおもしろ半分で診ているうちに

本格的になってしまいました。「持つて行く所がないから頼む」。と言うのが役所の弁。今までに約百七十件が搬入、勉強不足で野生復帰も二割程度。鳥のこともほとんど知らない自分にとって野鳥の会や自然保護協会への加入は必然的でした。

三浦二郎先生が根室地方から苦小牧へ移られる頃でもあり、長いおつき合いのうちに病気を移されており、ついに発症してしまった感じでした。

まだ五年余ですが、野生動物の臨床保護の遅れている状況を知り、改めて、道東の一獣医師として獣医師でなくとも関心のある多くの方々と共に奮起せねばならないナと痛感しています。

ミニ動物園を閉鎖してでも、保護センターを充実させてゆかねば、カッコ良く言えばライフワークとして取り組みたいと思っているのが正直な気持ちです。

幸い、私が考えていた以上に傷病保護についての雰囲気は向上しています。北海道獣医師会が元年度の活動方針に取り上げてくれ、四〇周年の大会では大会決議してくれるほど理解を示してくれています。昨年には、その獣医師会館で、二回目のシンポジウムを開き予想以上の参加を得ました。

行政も鉛中毒のハクチョウやリングブルのタンチョウなどの件もあり、予算の獲得に努力してくれています。地元の根室市庁長の協力もあり、逆に驚

いている有様です。

昨年、我保護センターを発足させ、個人でやっていたことを組織的にポラントニアで取り組むことになりました。また、「傷病動物救済研究会」がスタートし、単なる保護から一つの運動、私に言わせれば新しい自然保護運動と思っています。「どうせ自然淘汰されるのだから」と知らぬふりをするのではなく、結果的にダメでも、持ち込んでくれた自然保護に縁のない市民の気持を大切にしたいのです。その後の結果は、必ず知らせることにしています。きっと、彼らはこれを機会に自然を見る目が変わるのではと期待しています。我センターのキャッチフレーズ「小さな野生動物の生命を救うことが、大きな自然を守る一歩になるのでは」を大事にして行きたいと思えます。

一月に母校の酪農学園大学の講義で、目の輝く一年生に総論を話しました。何年か後に彼らに各論を語ることができるといえるといいナーと思っています。とにかく、マニュアルづくりが当面の目標です。

森田正治(もりた まさはる) 45才

- 滋賀県八日市出身 酪農学園大学卒
- 根室地区農業共済組合計根別支所勤務
- 森田どうぶつ公園代表、道東野生動物保護センター長